

第11回 今後の県立高校の在り方検討委員会

日 時 平成29年 5 月26日（金）

13:30～16:00

場 所 市町村振興センター大会議室（1）

1 会長あいさつ

皆さん、こんにちは。きょうは事務局の計らいで、ランチミーティングをさせていただきました。大変有意義な会で、この場よりも少しフランクな議論ができたのではないかと思います。そこで大事な議論は全部終わってしまったわけではないのですが、比較的、大事なことも出ましたので、委員会でも繰り返していただきますようお願いいたします。

また、お手元にこれまでの議論ということで、事務局にまとめていただいたものがあります。この委員会も7月、9月、11月、12月と、あと4回となり、そろそろまとめの段階に入っていく、大局を見据えながら具体的に議論をしなければならない点も残されておりますので、そうしたことを詰めていきたいと思っております。

きょうは、資料1の2ページの①個性に応じた多様な学びが希望する進路へとつながっていくような高校をどう実現するかを大項目にして、その中の論点3つを議論していただく格好になっております。限られた時間ではありますが、今後、また詰めが必要な部分もありますが、きょうはここに集中して議論をしてみたいと思っておりますので、ご協力いただきますようよろしくお願いいたします。

2 議事

【議題1 副会長の選任】

委員の互選により、田邊哲也委員を副会長に選任

【議題2 意見交換】

〔資料1、2を事務局より説明〕

<意見交換>

○肥後会長

私から事務局に確認をさせていただきたいが、資料の中には「次期再編成基本計画」と「在り方の検討」という二つの言葉があるが、この委員会に求められていることは、次期基本計画について「一定程度の具体案」を策定することなのか、それとも、そこへ向けての

「在り方の提言」という大枠の話をさせていただければ良いのか、このあたりをどう捉えれば良いか。

○事務局

いわゆる次期計画に向けてのご提言をいただきたいと思っている。大きな方向性、ありようについて、委員の皆様からさまざまな貴重なご意見をいただき、それをもとに、事務局で具体化について検討をしていきたいと考えている。

○肥後会長

事務局から次期再編成基本計画の案が出てきて、それをここで審議するのではなく、ここでは、あくまで大きな方向性の提言をさせていただき、その中に、例えば具体の例として数値が出てきたり、あるいは地域の名前が出てきたりすることはあるかと思うが、具体的な次期再編成基本計画をここで策定するものではないということを一応確認させていただいた。

○委員

資料の4ページに、県の学力観を踏まえ、高校入試改革、高大接続改革や教育の魅力化をもとに、どのような教育内容、教育環境を整えていけばよいか等について意見交換を行ったとあるが、この3点の検討事項というのは、どちらかというと、教育の魅力化の話が中心のような感じがした。教育の魅力化も大きなテーマだが、高校入試改革、高大接続改革の観点から考えていくことも必要だと思うので、この2点についても、ぜひ検討していきたい。

○肥後会長

前年度から県の入試が変わったということで、その実績データを示していただきながら、その成果とか、目指した課題がどの程度達成できたか、それに対する高校側や中学校側の反応がどうなのか、その報告はまた事務局から説明していただくことになっているので、今後、取り扱わないということではない。高大接続改革については、確かに話題の端々には出てきたが、じっくり検討してきたわけではない。今後、高校を卒業した後の進路を決める際に、もちろん就職という選択もあるが、大学あるいはそのほかの進学先に応じて、どういう形で仕上げていくべきなのかという議論は、高校で身につけた学力等をどう評価していくのかという問題ともかかわっているので、このことも当然ながら、今後議論していく論点だと思う。

○委員

4ページ目の後半の②「地域活性化と結びついた高校だけではなく、普遍的な価値を追求する高校も必要である」と記されているが、「地域活性化に結びついた高校だけではなく」という表現だと、普遍的な価値を追求する高校は、地域とは結びつかないのかという誤解を招きかねない。私は全ての高校が、普遍的な価値を追求する高校だと思っているので、地域活性化とかけ離れないような表現にしたほうが良いと思う。

〔資料３を事務局より説明〕

<意見交換>

○肥後会長

多様な評価方法、パフォーマンス評価、ルーブリック、ポートフォリオについて説明があったが、具体的に高校教育の中で、どの程度行われているか。

○事務局

一部の学校で、課題学習とか総合的な学習の時間で、ルーブリックをつくって、教員同士が共通目線で、この活動を通じてこういった力をつけていくことが必要ではないか、そういった目合わせをする意味で、活用している学校が多少出てきたかという程度である。

○肥後会長

一番難しいのは、例えば地域の人たちとの交流を通して、地域の資源を活用して課題発見・解決型学習をすると、評価がすごく難しく、大学も同じだが、必ず教員相互で意見のずれが出てくるし、コミュニケーションが必要になる。それをやる上で、今後、本気で発展させていくときに、どんな事例があって、良い取組がどんなもので、進んでいるのはここだというような事例を教えていただけるとありがたい。

○委員

この間、津和野高校で毎年行われている総合学習について聞いた。去年は防災と観光について、２グループに分かれて学習を行い、それぞれの発表を学校以外の方にも見ていただいている。

○肥後会長

総合的な学習の時間を中心としてさまざまなことが行われていると思うが、生徒の教科以外の取組を適切な形で評価していくことが必要ではないかという話につながっていくと思う。

○委員

これまで中山間地の学校を実際に視察し、非常に理解が深まったが、都市部の高校、特に普通科高校について、現状が把握できていない。通学区や地域外入学制限を考える上で、都市部の普通科高校の実情を把握するため、この会議の場ではなく、現場を見させていただきたい。

○事務局

前回会議でも、いわゆる大規模普通科高校の現状について知りたいという意見をいただいた。学校視察等を含めて検討しているが、できれば次回、松江北高校あるいは出雲高校で行われている、探求的な学習の取組についてお伝えできればと考えている。特に、出雲高校はSSH、SGHの取組が全国でも評価されているので、いわゆるグローバルな観点で取り組

んでいる高校生、あるいは地域の課題解決に向かって力を発揮している高校生の取組を聞けば、参考になるのではないかと考えている。

そうした普通科高校のありようを議論した上で、通学区や地域外入学制限について、課題、問題点についてご議論いただければと考えている。

○肥後会長

私としては、先進的な取り組みをしている普通科高校を見て、良い点や課題を上げながら、通学区の問題に議論を持っていくのは、ちょっと距離感があるのではないかと考えている。

もし通学区や地域外入学制限の問題を会議で一定程度議論したほうが良いのであれば、それに応じたデータを出していただきたいと思う。

○委員

地域特性のことだが、都市部というのは具体的に松江市と出雲市の話なのか、もう少し広い範囲なのか、ここに示されている地域とはどこなのか。以前、リーディング・スタディーとして浜田と江津の話を議論したが、これらはどの地域の話なのか。その辺は、はっきりさせておいたほうが良いと思う。

○委員

私もそのとおりだと思う。島根の高校の在り方を提言していく上で、島根の高校を一くくりにこうあるべきだと出せる部分もあるかもしれないが、地域によって、あるいは普通科高校と専門高校によって違うかもしれない。どういう軸で整理し提言していくのか、そこをぼんやりさせたまま議論を進めるよりは、軸をはっきりさせたほうが良いと思った。あと、アドミッション・ポリシーという言い方が良いかどうかは置くとして、島根の高校の特色としてそういうものがあるのはとても良いと思うので、議論していきたいと思う。高校入試改革もとても大切な論点であり、そこともリンクしてくると思うので、議論が深められたらうれしい。

○肥後会長

都市部と島嶼部、中山間地と一番違うのは、例えば、中学生の側から考えると、進路選択に一定の幅があるということ。島嶼部であれば残るか出るかのような話になり、それに対してどうブレーキをかけるかということで魅力化の取組が行われてきた。松江市内であれば、どこの高校に行こうか、普通科高校か専門高校か、公立か私立かという選択肢がある。つまり、選択肢がある地域の公立高校の在り方をどう考えるかという問題にしていかなければいけないと思う。そういう意味で、今の中学校の進路指導の在り方、中学校で高校進学に向けてどういう指導していて、何が課題であり、どういう問題を感じているのか、そのあたりをお聞きしたい。

できれば中学校での進路指導の実態について、少しデータを示しいただきながら、都市部における進路指導の問題を少し教えていただければ、通学区や地域外入学制限とか高校入試の在り方に直接つながっていくと思う。また、中学校長会の生の声を教えていただければと思う。

○委員

保護者として、2点。1点目は、子供たちが高校への進路選択を考えたときに、各学校の特色が明確化されていくことがすごく大事だと思う。アドミッション・ポリシーという表現が子供たちや保護者に伝わる表現なのかわからないが、各学校の特色の明確化、見える化、発信力は、大事だと思う。

2点目は、本日配布頂いた次第に記載されている、議題(2)の②社会や時代の要請に対応した高校教育の保証の部分。

I C T化、グローバル化とあるが、保護者としては、子供たちが高校から社会に出てからのことを考えたときに、この部分だけではすごく弱い気がする。島根の子どもたちに、社会に出てからの生き抜く力、心のたくましさを身につけてほしいと願っているので、前回の会議で配布頂いた、資料1（教育長メッセージ）に記載されている、島根県教育委員会が考える「学力観」を習得するための、島根県の高校教育の保証についての具体的な内容が入るとありがたい。また、地域企業の一員としても若者の離職率の高さが気になっているので、この点の改善につながる高校教育の在り方についても、委員間で議論出来ればありがたい。

○委員

肥後会長の話を聞きながら思ったが、中学生の進路選択の幅があるということは大事、本来にそのとおりで、大事にすべき軸だと思う。都市部の学校とはこうあるべき、中山間地域の学校はこうあるべき、島嶼部の学校はこうあるべきという分け方ではなく、石見、隠岐、松江、出雲、これらの地域をどうくくるかということはあるが、それぞれのエリアの中学生にとって望ましい分け方で考えたほうが、中学生の進路選択の幅を考える上で大事だと思う。

○委員

中山間地を代表して一言。美郷町は、12年前に県立邑智高校が統合でなくなった。したがって、町内に高校はない。進路選択が一番難しい問題だが、統合してから12年間、島根中央高校、飯南高校、大田高校へそれぞれ20%、20%、20%ぐらいの生徒が進学している。あとの4割は、ほとんど県内で、ばらばらな地域に進学している。高校の進路指導の先生と話をすると、一番の進路の決め手は、本人の希望以外に、通学ができる学校、寮へ入らなくても通学ができるということ。現在、島根中央高校と飯南高校から、スクールバスがそれぞれ美郷町内を走っている。したがって、進学者が当然多くなる。あと大田高校へ公共交通機関で

通っている生徒もいれば、寮へ入っている生徒もいる。

ただ、高校がなくなり、寂しい。（邑智高校の統合の話がでた時の）町民の反発はすごかった。だから、今回、この検討委員会に入るに当たり、美郷町のような寂しい思いをする地域は、出たくないという思いで参加している。

先ほど話があった特色化は、幅が広く、多様だと思うが、何とか打ち出していく必要があると思う。

I C Tについて、美郷町の小・中学校では、4校全て小学校4年生から中学校3年生まで、1人1台タブレットを入れている。ことし小学校3年生に入れて、再来年までに小学校1年生までに1人1台入れる予定である。生徒は、朝来たら、授業が始まる前までに自分の教室の保管庫（充電器）から、タブレットを出して操作ができる状態にしている。美郷町は、少子高齢化で大変な過疎地域である。情報だけは過疎にならないようにと始めた。美郷町の生徒は、基礎学力はまあまあだが、応用力、いわゆる表現力、判断力、思考力が劣る。そのため、ツールとしてデジタルを使い、言語活動に一生懸命取り組んでいる。

昨年一昨年と、高校に進学した子供たちと話す機会があったが、「近隣の高校へ行ったら、I C Tは進んでいない」と話していた。島根県は大変遅れているのではないかと。昨年の秋に全国I C T教育首長協議会というのができ、全国で117の自治体が加盟しているが、島根県で加盟しているのは美郷町だけである。鳥取県はゼロ。中国5県では、岡山が大変進んでいる。佐賀県の県立高校では、入学するときにタブレットを1人1台買っている。8万円超するが、個人負担が5万円ぐらいで、あとは県が負担している。小・中学校でも、8割くらいの学校で、1人1台持っている。これからの時代、I C Tに頼るのではなく、ツールとして、アナログと併用しながら使い、子供たちの意欲を伸ばしていくことが大変重要だと思う。これも1つの特色ではないかと思う。島根県内の高校のI C T状況をわかる範囲で教えていただければと思う。

○肥後会長

数年前の全国調査では、島根県はかなり厳しい結果が出ていた。美郷町では児童生徒に配付するという形で、子供たちが主体的に使えるようしていると話されたが、当然ながら、教員の側がそれを活用し、良い教育ができる素地がないとできないので、教員側のI C Tを活用した授業展開の技術、その研修体制など紹介いただければと思う。

○委員

地域の特性とあるが、松江北高校の教育方針は5つある。その中の1つに、地域に役立つか日本に役立つか世界に役立つか、それを生徒が自分で考え自分で育てていくという教育方針が以前からある。地域だとか、日本だとか、世界だとか、特化する必要はないと思う。し

かし、特化する必要はないとしても、学校はある程度何に重点を置く学校であるかは示す必要がある。

中学校へ行くことがあるが、そのときに言うのは、同じ目標、大きくいうと志になるかもしれないが、普通科の場合は区別感が全然ないので、同じ目標がある仲間とやっていける学校だということを言わないと難しい。だから、ある程度、医師とか、看護師だとか、薬剤師だとか、医療関係だけとは限らないが、そういう進路を重視している学校だと、そういう人材をつくるということをアドミッション・ポリシーとして言わないと、中学生にとってわかりづらい。

○委員

教育改革が行われる中で、私学も含めて教員も新しい流れに対応するため、どういう形で、どういう体制で教育を行っていくか、どういう形でこれから力をつけていくかを考えていかなければならない。一方で、新しい学習指導要領や高大連携の取り組みをする上で、教員の姿、教員像についても考えていく必要がある。

○委員

確かに教員研修の問題もあるが、教員はすごく忙しい。部活動が1番の要因であると言われるが、100時間を超える残業をしている。先ほどから話が出ているICT関連や課題発見・解決型学習には、すごく時間と手間がかかる。先生たちは多忙である。その上で、ICT機材を使いながら、いわゆる思考力、判断力、表現力をつけるような教育を研究するには、教員の定数がある程度ふやす必要がある。1人の人にスーパーマンになりなさいと言っても、時間的、物理的な制限がある。標準法に従って教員の数を決めているが、ある程度改善が必要であると思う。

○委員

定時制、通信制の高校の取材に随分行ったことがあるが、進路の選択肢の幅は広く、普通科高校や農業高校ではないところで学びたい、意欲を持って学んでいる方にいっぱい出会った。そういう人たちの進路を保障することもすごく大事である。この場での議論にはならないかもしれないが、フリースクールも含めて、学び続けられる環境、島根の子供たちが通える範囲で学べる環境をどう整えていくか。

もう一つは、最近随分AIが話題になっているが、AIによってなくなる職業がいろいろ言われている中、そのことも少し頭の中に入れておいても良いのではないかと思います。

○肥後会長

通級指導、通常の学級にしながら、障がいに対応した必要な指導をある特定の時間、あるいは放課後に、学校の中もしくは他校にある教室に通って指導を受けるという仕組みが高校

でも整備される。通級指導を高校にも導入することが全国的に行われ始めたので、このことも考えに入れながら議論していくことが必要だと思う。

○委員

アドミッション・ポリシーにこだわるが、学校の特色というよりは、ここに来たらこういう力が身につくという、生徒にとっての価値を出す必要がある。

○肥後会長

さきほどから出ている議論の一つのポイントは、ある種の特色化、重点化という話だが、すごく難しいのは、カリキュラムの組み方で、高校の教育課程が単位制によるところもあるが、教員の多忙感の問題も、そのことと関係があって、授業数を減らす減らさないということだけではないかもしれないが、結局、授業のスリム化をやらないと特色化もできない。全部の単位を全部拾わせて、どこを受けても大丈夫なようにしようみたいなことをやっている、多忙感は減らないし、そのための人員も必要になる。

高校の具体のカリキュラムにまでこの委員会で踏み込む時間はないと思うが、ある高校に限られた資源（教員数や設備等）の中で思い切った専門化、重点化、特色の明確化を行うということは、「この高校に来ると他にはないこんなことができます」と言うかわりに、「これはできません」も言うことになるだろう。

○委員

結局、その部分は各学校が選択するしかないと思う。先ほど言われたように、学校がこれはできなというのは、言いにくいと思う。だが、どこかの地域では、これは切らざるを得ない、選択せざるを得ないということが出てくると思う。

必須の教科科目は決められているが、各大学が要求する教科科目は広いので、その部分で、学校がどうしてもある程度取捨選択せざるを得ない。

○委員

高校教員が少ないと常々感じている。もう一つ感じているのは、今、小・中学校では普通学級に支援の必要な生徒が大変ふえている。その生徒たちを高校へ送るときに、丁寧に中学校から高校へ情報を伝えて送る。しかし、高校側はどうも忙しいからか、特別に支援の必要な生徒のフォローができていない。高校に進学したがやめて、ほかの学校に移ったり就職したりする生徒が何人も出ている。これからそういう生徒を出さなくするためには、高校の先生、生徒指導の先生、進路指導の先生が少ないように常々、感じている。ぜひ、そういった面も特色の一つとして、インクルーシブ教育と兼ねて、お願いできたらと思う。

○委員

教員の数となると、もちろん予算のこともあるとは思いますが、前回のこの会議で中学校の状

況についての報道を紹介したが、高校においてもそのような実態があるということがきょう垣間見え、非常に危惧している。

生徒にとって学校で一番影響力があるのはやはり指導者、先生である。先生が忙し過ぎて生徒と向き合うことが難しいということであれば、生徒にとって不幸だと思う。先ほど出た部活動の先生の残業時間が100時間を超えているという話も、その部活動の先生たちも非常に情熱があって、嫌々その時間を迎えているわけではなく、自分はこうしたいのだというしっかりとした信念を持ちながら、結果的にそうなっていると思うので、むげにそれをだめですと切って切るのも、どうかと思う。

そのあたり、お金のかかることで大変だとは思いますが、教員数をふやすことも島根らしさとして発揮できるところではないか。

それともう1点。アドミッション・ポリシーの話が先ほどから出ているが、今、高校という視点で話をしているので、高校にズームインした話になっているが、社会に出るまでの過程の中で、小・中・高、あるいは大学を経て社会人になるというプロセスの中の一つであるという捉え方が非常に大事だと思っている。アドミッション・ポリシーは非常に大事だとは思いますが、余りにも突出したことをやってしまうと、それはそれで生徒たちの選択肢を逆に失くしてしまう危険性もあるので、そのあたりのバランスというのは非常に大事ではないかと思う。

○委員

アドミッション・ポリシー、高校がこういう特色でこんな生徒に来てほしいと伝えるほど、逆にそれを選ぶ中学生はそれに応えるだけの自分の確固たるものを持っていないと、選べない、選択する力をつけなくてはいけないということを感じたので、今の言葉で少し気が楽になった。

ただ、時代の進み方が速いがゆえに、子供たちに求めるもの、完成するスピードを急いでいる。そういう意味では何か、かつてのモラトリアム的な猶予があって自分でゆっくり力をつけていくといった時代に比べ、早急に生き方、目指す姿を決め、職業も選び、再チャレンジをしてもいいということが、逆に子供たちを苦しめているのではないかと思った。

そういう意味で、さきほど小・中・高・大のプロセスという話があったが、どんな時代にも適応できる根っこの部分を、義務教育の段階で汎用性のあるものをしっかり身につけて、高校の段階で専門性なり特色ある、そういったところに向かえるような形にしていくことが、義務教育の役割だと感じた。ただ、子供たちもしんどいし、大人もしんどいし、みんなしんどくなっていくのはなぜなのか、傍観者的な意見で申しわけないが感じた。

○肥後会長

このジェネラリストとスペシャリストの話は難しい話である。たとえば高校生の進路指導の例としてよく言われることだが、生徒が学校の先生になることを進路の一つとして考えている時、教育学部（教員養成学部）という選択肢はあまり好まれない傾向にある。なぜなら他の学部（人文・社会系の学部や理工系の学部など）に進学しても「（他の道も残しながら）教員免許は取れるよ」という進路指導を受けるからであり、逆に教育学部に行くと「学校の先生にしかねないよ」ということになるからである。前者はジェネラリストの道であり、後者がスペシャリストの道ということになる。この結果、全国どの教育学部も志願者倍率はそれほど高くない状況になる。

今の時代、子供たちは、自分の可能性をどこまでも保持しようとする傾向があつて、それは悪いことではないが、逆に言うと、いつまでも働けない傾向をある意味では助長している可能性もある。自分の可能性をどのように絞っていくか、逆に残しておくか、この議論にどうしてもなってしまうので非常に難しいと思う。中学校の義務教育段階では、できるだけジェネラルな力をつけてやって、高校で一定程度スペシャルなところへ、少し絞り込みをしたほうが良いのではないかという議論もあるし、余り絞り込み過ぎると、その後の可能性を潰してしまうのではないかという議論もある。大学を卒業した後に、別の大学に入り直すということもあるし、大学4年間はまだジェネラリストで良いという議論もある。

この辺は慎重に考えなければいけないが、高校の魅力化、特色化が単純に職業の絞り込みにつながっていくような議論はまずいと思う。そうではなく、自分の特性に合った高校を選んでいくという形での重点化、そういったことは可能ではないかと思うがどうか。

○委員

やりたいことがない子供が、今、すごく困っている。何かなりたいものがあつて、そこを目指して、ビジョンを描いて進んでいけみたいな雰囲気すごく強い。でも、昔を振り返ってみると、そうでもない。そういう意味で私がアドミッション・ポリシーと言っているのは、ここに行ったら宇宙飛行士になれるといった意味ではなく、ここの高校だと大学に行きやすいけど、ここだったら職業人になりやすいといった、そういう何を自分が選んでいるのかが、もっと見えると良いという意味で言っている。

私は、社会との接続がもう少し知りたかったという思いがある。ここを選んだことが、どういう選択肢につながるのか、もっと中・高・大の役割分担の中で見えると良いと自分自身の経験も踏まえて思っている。ここを選んだことで自分が何を選んでいるのか、どういう選択肢に近づいているのかというところが社会に向かって見えるようになると良いと感じている。

○肥後会長

特色のある進路に向かって一定の絞り込んだ選択が可能になるということとセットになっているのは、やり直しができる（再選択の可能性や自由）ということ。生まれた年度がたまたま同じ一団が同じように6・3・3・4と進んでいかなければいけない、それ以外の選択をしたら、あるいはそこから逸脱したら大きな不利益を被るといった、これまでの時代のイメージではこの話はできない。基本的には選択と再選択ができるということが、全体として目指している方向性だと思う。

だから、その辺は少しイメージを切りかえていかなければいけない時代ではないかと思うが、もう一つは、やはり潤沢に選択肢を用意して、どこに行っても何でもできますということができるような状況なのかということを考えたときに、一定の絞り込みはしていかなざるを得ないのではないかという議論でもあろうかと思う。

○委員

子供たちの選択する力を身につけさせるのは良いと思った。

津和野の話だが、この間、ケーブルテレビで子ども議会が放送されていた。小学生が町長、執行部と会議をしていた。子供たちは、政治に興味を持ち、発言する能力をつけ、自分に自信をつける、発想が広がる。町に対して自分の夢を膨らませて意見をぶつけていく中で、自分たちに力があるという自信をつける、小さいうちからそういう力をつけていくというのはすばらしい、それを選択の力に変えてくれるのではないかと思った。

ただ、高校に進むと教科を選択しなければいけないが、例えば生物が好きだからという理由だけで生物を選択すると、後で進学を希望する大学には入れないということがある。だから、学校がこれを選択するとういう進路に広がるということを提示できれば、生徒は迷わなくて済む。安易に自分の好きなことだけをすると、自分が本当に好きなことができなくなることもある、学校が生徒にそういう目安をつくってあげることができたら、生徒に選択の力がつき、考える力がもっとつくのではないかと思った。

○委員

さきほどから教員の問題が出ているが、私もやはり教員に負担をかけるのはいけないと思っている。大事なのは教員をふやすということではなく、教員の本来の力が発揮できる環境を整えることだと思う。

○委員

そういう意味で、単に先生をふやせと言うと、お金がない、終わり、思考停止になる。そうではなく、先生が本来の能力、やるべきことが発揮できる環境をどう整えるかということにおいて、もちろん数をふやすということもあるし、必要のない仕事を減量する、その地域

とかほかの者が担えることもあるかもしれない。そういうことも含めて、役割分担とか減量とか、いろいろなアプローチを考えていかないといけない。先生がやるべきことができないという状況を改善し、環境を整える、これはぜひ実現できればと思う。

○委員

教員にも得意不得意がある。その辺で違いがあり、先ほど残業時間が100時間といったが、100時間の人もいれば、10時間の人もいる。課題発見・解決型の授業を自分で開発していく人もいれば、できない人もいる。（教員の）数の問題も現実にはあるが、研修環境を整えることも必要である。

ヨーロッパ、東南アジアでは、何年間か勤めると何年間か給料をもらいながら研究ができるという機会がある。そういう制度を導入することもあるかもしれない。

○肥後会長

皆さんに聞きたいが、高校教育のことを頭に浮かべた時、グローバル化とは何のことを言っていると思うか。

○委員

S G Hは、今年度の募集はない。S S Hはまだ続くと思うが、S G Hは将来像がだんだんわからなくなってきた。

○肥後会長

目標の持ち方がすごく大事で、中途半端に英語の会話の時間をふやしても何の効果もない。これから、カリキュラム上重視されることはあるかもしれないが、具体的には今回大学入試にかかって言われているのは英検の話であったり、T O F E Lの話であったりする。

大学もよくグローバル化と言われるが、結果として、何%の授業を英語でやっているか、学生のうち何%が1カ月以上あるいは3週間以上の海外経験があるかという数を上げることぐらいのレベルで言われている。

皆さん、中四国の国立大学の留学生の数は全体の何%ぐらいだと思われるか。中四国の大学の平均値は3%程度だという。1,000人いれば30人ということになる。何%にするのがいいかわからないが、問題は数値を上げることよりも、上げたことによって何が起るか、進路に何が開けるかということだと思う。もちろん現状の底上げはしなければいけないレベルで、全体の何%というのは要るが、グローバル化の一番の問題はそこで、何をすることがグローバル化で、何を目指すのかということ。そのあたりがすごく大事で、確かに取り組んでいる高校もあるし、今、インターネットの発達によって、海外に行くことばかりがグローバル化ではないので、そのあたりも含めて、幾つか目標を決めればできることもあって、そのことに力を入れる高校があっても良いのではないか。隠岐島前高校もかなり、そういった

方向で取り組まれている。みんなで海外研修旅行に行くという方法があってもよいと思うが、それをグローバル化というかどうか（生徒の進路選択、キャリア形成、能力向上につながるような目標設定型の教育プログラムになっているかどうか）はわからない。

高校生の段階で何かグローバル化に関連して、こういう取組があったほうが良いのではないか、こういうことができる高校が県内にあれば、そういうところを目指す生徒もいるのではないかといったことについて、考えがあれば、また次回でも結構なので、お聞かせいただきたい。グローバル化の議論をするときに、そういった点が比較的大事で、これからはグローバル化も必要だと1行書いたからといって、どうにかなるわけではない。

○委員

グローバルに関連して、津和野でフィンランドに行っている生徒がこの7月に帰ってくる。日照時間が4時間しかない生活の中で、暗い昼間をどう過ごすかを楽しんでいるようだ。帰ってきて、お土産話をいっぱいしてくれるのではないかと期待している。

もう一つ、ホストファミリー募集。海外の生徒を同級生ぐらいの生徒がいる家に住まわせて、中学校、高校に通わせる。海外の生徒と交流ができるし、海外から来た生徒も日本の文化、生活を味わえる。国際交流、プチ国際交流。現在は1週間程度だが、1年間の交流もやりたいし、津和野からまた海外留学させることも考えられている。

○委員

グローバル化ということだが、国際社会にどう対応できる人材を育てるかということだと思う。弊社のことをオーバーラップすると、今、県でもインバウンドに取り組んでいるが、企業としてもこれまで、国を介して外国とのつながりがあった。今は各局が各国と直に仕事をし、話をし、いろいろな仕事を一緒にやっている。例えば今年だと、シンガポールに行って島根の紹介をしたが、ただ英語がしゃべられるということではなく、外国人としっかりと向き合える、日本のこと、島根のことをしっかり伝えることができる、やはりそういう人材が必要である。今、いろいろな国の方々をお迎えするおもてなしの中で、やはりそういう人材が求められている。

それと、ICTという言葉があるが、ICTの「C」というのは、身近な人とのコミュニケーションだけではなく、県外、中国地方以外、世界であるとか、そういったところの人とのコミュニケーションを堂々とできる人材を育てていくという意味もあると思うので、そういった意味においては必要なことではないかと思う。

○肥後会長

今回は、宿題（高校入試改革における成果と課題）、比較的複数の普通科高校がある地域、都市部での課題が何であるか、それから中学生の進路選択の在り方、あるいは、高校の重点

化、アドミッション・ポリシーの確立、ICT化やグローバル化の話を議題にしたいと思う。

それから、先生の多忙感、高校の一番大切な子供と向き合う、保護者と向き合う時間をどう確保したら良いか、その辺りも少し議論したいと思う。

3 教育監あいさつ

長時間にわたるご審議ありがとうございました。また、今回から、田邊委員様には新たにメンバーに加わっていただき、新しい視点からご意見を頂戴できましたこと、感謝をしております。

毎回2時間少しの議論で、皆様方からさまざまなご意見をいただいております。私は、議事録がまとまってからその議事録をしっかりと読ませていただき、皆様方の一つ一つの発言の背景にはどんな思いがあるのか、思いをめぐらせております。個人的には、かなり議論が深まってきているという感想を持たせていただいております。

また、きょうは、途中で教員定数の話題が出ました。ご案内のとおり本県では、小学校、中学校は県単独の予算で少人数学級編制しておりますが、県立学校ではまだ実現できていません。委員の皆様方からは県教委頑張れというようなエールを送られたという思いをしたところでございます。さまざまな課題を解決しながら、子供たちの魅力的な教育活動が実現できるように、皆様方からのご意見を拝聴してまいりたいと思っております。

残り数回でございますが、またさまざまな方面から引き続きご意見を賜りますようお願い申し上げます。本日の閉会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。